

# ひらくびつかん

HIRATSUKA CITY MUSEUM '83 7月号

## 夏期特別展

-高山市所蔵資料展-

# 飛驒の民具

7月20日→8月30日

(7月31日・毎週月曜日は休館)

●記念講演会 8月7日(日)午後2時 博物館講堂  
「飛驒びとのくらしと民具」 講師 長角 三朗氏  
(飛驒民俗研究家)

☆☆☆平塚市は、昨年、市制施行50周年を機に、岐阜県の高山市と友好都市の提携を結びました。

すでに、両市の間では友好親善の交流が活発に行われておりますが、このたび博物館では、さらにこの友好親善の環を広げるとともに、高山市民の生活や文化の一端に触れて、文化の向上に資するため、「飛驒の民具」と題する特別展を開催することになりました。

今回の特別展は、飛驒地方の農山村や高山の町屋の人びとの暮らしぶりにスポットをあて、飛驒民俗村や高山市郷土館などから資料を借用し、展示のテーマを、①飛驒びとのくらし、②町のくらしと文化、③林業と木地文化、の三つの小テーマに分けて展示します。

高山を紹介するビデオの放映なども行います。



## 7月の行事

1	金	
2	土	プラネタリウム、古文書講読会
3	日	プラネタリウム 自然観察会「大山川を訪ねて」
4	月	(休館日)
5	火	
6	水	
7	木	
8	金	
9	土	プラネタリウム、石仏を調べる会 土曜観察会「高麗山の季節ごよみ」
10	日	プラネタリウム
11	月	(休館日)
12	火	
13	水	
14	木	デッサン教室
15	金	*
16	土	プラネタリウム、古文書講読会
17	日	プラネタリウム 地層観察会「断層を調べる」
18	月	(休館日)
19	火	
20	水	
21	木	プラネタリウム
22	金	
23	土	プラネタリウム、石仏を調べる会 土曜観察会「高麗山の季節ごよみ」
24	日	プラネタリウム
25	月	(休館日)
26	火	
27	水	体験学習会「麦から細工」 プラネタリウム
28	木	プラネタリウム
29	金	夏休み自由研究相談会
30	土	プラネタリウム、星を見る会
31	日	(月末休館日)

\* 7月のプラネタリウムは、「木星・土星の旅」をテーマに投影中



あなたも参加してみませんか~

●体験学習No.75「麦から細工」麦からを使って虫かごなどを作ります。▶7月27日(水)。

10~15時▶博物館・科学教室▶申し込みは7月22日まで往復ハガキで。多数の場合は抽選。

●自然観察入門講座「貝化石を調べよう」二宮層及び大磯層の貝化石を調べます。▶7月27日(水)、31日(日)、8月3日(水)。雨天中止。

▶大磯町虫窪、西小磯付近、博物館で。▶小学校4年生以上▶申し込みは7月20日まで往復ハガキで。多数の場合は抽選で30名。

●夏休み自由研究相談会考古・民俗・歴史・生物・地質・天文・美術の各分野について、自由研究の進め方や資料などの相談に応じます。▶7月29日(金)、8月19日(金)。10~15時▶博物館・科学教室。

●市民のアトリエ・水彩教室生徒募集 7月20日(水)~30日(土)。連続10日間。▶高校生以上一般成人30名。▶申し込みは7月10日まで往復ハガキで。多数の場合は抽選。

●星を見る会夏の夜空を飾る惑星、星雲、星団を望遠鏡を使って観察します。▶7月30日(土)惑星をみよう(1)、8月4日(木)夏の星座、8月24日(水)惑星をみよう(2)。▶博物館・科学教室。いずれも18~20時。参加自由。

●体験学習No.76「土器を作ろう」岡崎上ノ入B遺跡から出土した縄文中・後期の土器を作ります。▶8月5日(金)、6日(土)、7日(日)の3日間。10~16時30分▶博物館・科学教室▶親子で、連続3日間参加できる方(子供は小学校3年生以上)▶申し込みは7月23日まで往復ハガキで。多数の場合は抽選で15組。

●自然観察入門講座「シデムシを調べよう」腐肉を使った落し穴で、シデムシを集め、環境による種類の違いなどを調べます。▶8月18日(木)と23日(火)。2日間▶市内吉沢と博物館で▶小学生4年生以上▶申し込みは8月5日まで往復ハガキで。多数の場合は抽選で20名。

●寄贈品コーナー高瀬コレクション「高麗寺」展を行っています。▶7月30日まで。

牛小舎のツバメたち

6月16日(木) 雨

週の始めに梅雨入り宣言が出された後、また晴の日が続いているが、今日は梅雨らしい雨空になった。博物館は全館くま蒸中で建物に入れないで、傘をさして調査に出かけることにした。3年ほど「みんなで調べよう」という行事でやってきた市内のツバメの巣の分布調査の、最後の補充調査として吉沢の山の神から山入を歩くつもりである。

山の神でバスを降り、ゆるい上り道を部落の方に登ってゆく。道のわきの崖にはシモツケのピンクの花が咲き始め、ホタルブクロの薄紫の花があちこちで雨にうたれている。クチュクチュという声に、空を見上げると電線に8羽のツバメがとまっていた。どれも尾の短かい、巣立ったばかりの子ツバメ達だ。

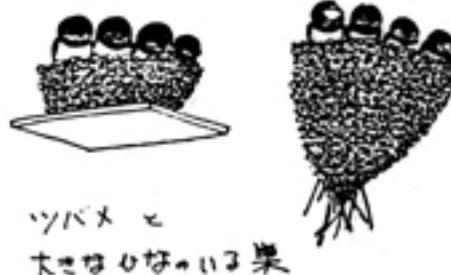
ツバメの巣を探して土屋や吉沢を何日か歩いたが、巣のあるのはほとんど牛小舎の中である。昔は母屋（おもや）の玄関先や土間の天井にもよく巣を作ったらしいが、「家を建て直して新しくすると、しめっきりになるし、部屋を巣で汚されると困るから追い払うし、自然に主屋には作らなくなつた。」というのが、どこでも聞かされた話だった。山の神でも、まず牛小舎のある1軒を訪ねてみた。

家を訪ねて「市の博物館の者ですが・・・」と切り出すと、誰の顔にも「何の用だろう・・・」という警戒の色が浮かぶ。「実はツバメの巣を探しているんですが」と続けると、「ああ、ツバメですか。ありますよ。どうぞ見てください。」と、にこやかな言葉が返ってくる。ツバメはみんなに好かれている鳥だと、つくづくそう思う。

山の神で最初に訪ねた牛小舎にもたくさんのツバメの巣があった。ざつと数えたところでも、親が出入りしたりひなのいる巣が6つ、すでに巣立った巣が8つあった。そ



この御主人は、ツバメには特に 관심が強いらしく、いろいろな見聞を聞かせてくれた。巣立ったばかりの子ツバメは、牛小舎のまわりに多いオニグモの網にかかることがあると言う。ツバメがさわいでいるので行ってみると、網にかかった子ツバメは、翼に糸がからんで飛べないのか、だ



らんとぶら下がっている。それを助けて、クモの糸をふき取り、放してやることが年に2回くらいあるそうだ。

親ツバメがネコに取られてしまうところも見たという。牛小舎に入ってきたネコに、1羽のツバメが果敢に攻撃をしきけ、何度も低空飛行でつかかっていったが、そのノラネコの手のすばやい一撃ではたき落とされてしまった。何回も同じコースを飛んだから、ネコにタイミングを合わされてしまったんだとは主人の弁である。

山の神から山入さらに飛谷津と足をのばし、最後の調査地人増にやってきた。一時上がりそうになつた雨は、また雨足が強くなり、一日中降り続いている。雨の中、上空をヒリリン、ヒリリンと鳴きながら3羽のサンショウウクイが飛んでいった。

結局、この日の調査では15か所の牛小舎で、合計64個の巣を確認することができた。順調に行けば、この春、これらの巣からは500羽以上の子ツバメが生まれる計算になる。平塚市全体をみても、西部丘陵地の牛小舎はもっともツバメの人口が集中している地域である。ただ一つ気になつたのは、同じ牛小舎でも巣の多い所と、巣が1~2個しかない所があることだ。そして、そのちがいの理由は、牛小屋の主人がツバメに関心を寄せているか、糞除けなどをこまめに作りツバメを牛と共存させる配慮をしてくれているかにかかっているらしいのである。ツバメが巣を作ると縁起がよい、という言い伝えがいつまでも生き続けてほしいと思った。

(浜口学芸員)

# § 平塚なうまんぞう物語 §

## 1 発掘の経過

昨年暮れ、今まで大磯丘陵でみつかっていないかった、8~7万年前の水成層（水中に堆積した地層）が市内根坂間で初めて認められた。これを機会に、この時期の水成層がどのような環境のもとで堆積したかを調べるために、今年2月にこの時期の水成層を捜しに上吉沢山入付近に調査に出かけた。この調査は、日本大学千葉達朗氏及び明治大学米沢宏氏の協力を得ての共同調査であった。この調査の初日に、上吉沢山田屋敷の城南白洋舎裏の露頭（吉川光雄氏所有）で崖の下に骨片が散在しているのを見つけて、3人で発掘したところ、ゾウの臼歯であることがわかった。さらに奥を発掘すると、左の下顎骨が臼歯のついたまま見出された。哺乳動物化石を発見・発掘することは初めてで、思ってもみなかったことであり、掘り方もわからず、数個にこわれてしまった。あとで思えば、8万年の眠りからさめたナウマンゾウにとっては可愛想なことをしてしまった。

この産出した化石は、極めて保存状態が悪く、表面を手で触ると粘土の様にねっとりしており、水分を含んでぶよぶよの状態であった。したがつ

て、瞬間接着剤とアクリル樹脂を駆使して、化石を固化させながら、化石についている泥やレキを取り除いた。また、破損した骨を一つ一つ接着して復元した。

この段階で産出したのは左右の下顎骨であり、左下顎骨はほぼ完全にとりあげられた。右下顎骨は露頭面にかなり長期間さらされていたらしく、半分ほどなくなっていることがわかった。露頭下に散在していたのはこの右の臼歯片であった。

復元作業と並行して、まだ他にも地層中に骨が埋積されていると考えられるため、地主さんの許可を得て、3~4月にかけて博物館で発掘調査を行った。この発掘には、古生物学を専門とする横浜国立大学の長谷川善和教授に御指導をあおぎ、服部郁子氏をはじめとする横浜国立大学・日本大学・明治大学の大学院生及び大学生のほか、博物館の地層観察会会員の方々にも御協力をいただいた。

この第二次発掘の結果、新たに首及び胸の脊椎骨（頸椎、胸椎）や右下顎骨の一部（前に産出した右下顎骨につながるものかも知れない）がみつかったほか、15点ほどの骨片が産出した。また、これらが産出した層準より高い位置から、鹿の臼歯6片がみつかり、さらにその上位からは、ゾウの臼歯の咬板（ゾウでは咬板と呼ばれる薄い板状のものが十数枚重なって1つの臼歯を作る）や歯根も産出した。

多くの骨化石が、ある特定の層準から産出するのに、上位の地層からもゾウの臼歯片がみつかるということは、ここに2頭以上のゾウ化石が埋まっているものかも知れない。いずれにしろ、そのうちの1頭は、下顎の臼歯の大きさから考えて、年齢50~60歳くらいのナウマンゾウであった。

現在、発掘資試料の整理と復元を継続中であり、さらに夏休みに最終発掘を計画している。  
（森・学芸員）  
(次号へつづく)

